

「「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス」2008年度第2回

日時：2008年7月5日（土）午後1時半より午後6時

場所：マルチメディア会議室（304室）

研究者名（所属）及び報告タイトル：

1) 山本真鳥（AA研共同研究員、法政大学）

「ニュージーランド在住太平洋諸島民の芸術活動」

2) 佐藤純子（東京大学大学院）

「中部ジャワにおけるバティック工房の「もの」たちと労働」

=====

ニュージーランド在住太平洋諸島民の芸術活動

山本 真鳥（法政大学）

1. はじめに
2. 太平洋諸島からの移民
3. 太平洋の芸術活動
4. 太平洋諸島民と芸術活動
5. 太平洋諸島民とマオリ、それぞれの芸術活動
6. おわりに——今後の展望

1) はじめに

太平洋諸島民、特にポリネシア系のアイデンティティを持つ人々の半数以上は本国には居住しておらず、アメリカ合衆国、ニュージーランド等の環太平洋先進国へと移民していることが多い。彼らのなか、特にニュージーランド在住の移民たちの間では芸術活動が大変盛んである。今回はその概観を紹介することを目的としている。

2) 太平洋諸島からの移民

第二次大戦後、ニュージーランドの工業化

マオリ人が都市に移動して労働者に（白人は rural area で農場）

足りない部分を太平洋諸島からの移民が埋める

西サモア、トンガ、クック諸島、ニウエ島、トケラウ諸島などポリネシア系

西サモアは、国連信託統治領、1962年独立

トンガは、ずっと独立国（外交的にはイギリスの保護）

クック諸島（自治領、ニュージーランドと自由連合）、ニウエ島（自治領、ニュージー

ランドと自由連合）、トケラウ諸島（ニュージーランド領）

クック諸島、ニウエ島、トケラウ諸島はニュージーランド・パスポートを支給されており、自由に行き来可。

ニュージーランド在住はほとんどがポリネシア系

3) 太平洋 (ポリネシア) の「伝統的」芸術活動

- ・ 原始美術、未開芸術 → メラネシアの造形芸術は衝撃的
芸術人類学の主題 (芸術とは何か? 芸術様式と文化=比較、 様式の交流=伝播)
に迫るもの
- ・ ポリネシア、特に西ポリネシア (対象太平洋諸島民出身地) は造形芸術は比較的寂しい
- ・ 彫刻 (NZ マオリ、クック諸島) は、他地域はあまり盛んではなかった
- ・ タパ (樹皮布)、手編物類、入れ墨、武器、カヴァ・ボウル、装飾品等が主たるもの
- ・ 近代にできあがった伝統
クック諸島の刺し子 (tivaevae)
サモア (アメリカ領サモア) のタパデザイン壁飾り
サモアの切り株の彫刻 (イタリア人アーティストの指導)
お土産のバスケット

4) 太平洋諸島民と芸術活動

Speaking in Colour に紹介してあるアーティストたち

Fatu Feu'u (Samoa): 1946 年生まれ、20 歳で来 NZ。最初は工場労働者、生地プリントメーカーに就職して開花。油絵が主。タパや入れ墨のデザインをモチーフとする。タウタイ・トラストの創始者。

Tautai Contemporary Pacific Arts Trust

<http://www.tautaipacific.com/>

Pauline Hoeft-Cocker (Tonga, Cook): NZ 生まれ。父は Tonga/German、母は Rarotongan、陶器。

John Ioane (Samoa): アイデンティティの問題に悩む。白人の血を引いていると思っていたら、違っていた。優越感を抱いていた自分への嫌悪感に悩む。アメリカのブラック・ミュージックの影響も。1990 年代半ばに、オブジェ、音楽やビデオ、パフォーマンスを総合した現代芸術展。

Lily Laita (Maori, Samoa): 1990 年に最初の太平洋諸島民女性としてエラム美術学校を卒業。NZ 生まれ。油絵。抽象画。

Iosefa Leo (Samoa): サモア生まれ。初等・中等教育はサモア。1987 年に来 NZ。ニュージーランドで専門家の指導を受けて、妻に助けられ彫刻家となる。ニュージーランドの田舎住まい。

Lyle Peninsula (Samoa): 1968 年 NZ 生まれ。父サモア人、母 NZ 白人。自分を描く。ポップアートめいた油絵。アイデンティティに揺れ、ポリネシア人アーティストとしてのみ知られるのはいやだ、と思っている。ダニーデンのアート・スクール出身。

John Pule (Niue): 1962 年ニウエ生まれ。3 歳で来 NZ。タパなどポリネシアデザインを用いる画家。タパをキャンバスとすることも。石版画も。詩も書く。ヨーロッパ人アーティストにも精通、しかし独学。オークランド在住。

Filipe Tohi (Tonga): 1978 年に 19 歳で来 NZ。現代造形作家。New Plymouth 在住。アートは好きだが、一介の労働者。働いていたのが、芸術保存の役所。才能を見いだされて、指導者も現れ、アーティストに。

Michael Tuffery (Samoa): 母サモア人、父ニュージーランド白人。ニュージーランド生まれ。タパをキャンバスとする絵画。油絵。入れ墨・タパのデザインを用いた油絵等。有名なのは、コーンビーフの空缶でつくった牛のオブジェ。彫刻、魚の造形も。芸術祭の official artist の経験も。

Jim Vivieaere (Cook): ニュージーランド生まれ。ニュージーランド田舎の優等生として、医学部に行くことが期待されていたが、クライストチャーチのアート・スクールへ進学してグラフィックデザインを学ぶ。自身のアートもあるが、curator としての活躍が目立つ。Te Papa のパシフィックの installation など。

この他のアーティスト

Niki Hastings McFall (Samoa): アーティストになる以前、ほとんど白人の生活を送っていた。アクセサリーメーカーとして開花。オブジェなども制作。

Toshiyuki Kihara (Samoa): 日本人とのハーフ。ニュージーランドにて服飾学校を卒業後、T シャツメーカーに就職。その後アーティストに。油絵を含みさまざまなジャンルに挑戦の後、現在はセルフ・ポートレートで有名。fa'afafine。

Evotia Tamua (Samoa): NZ 生まれ。オークランドで写真学校卒業後、フォト・ジャーナリスト。太平洋に関わるもの（主として人物）を被写体とする。

・ Tautai の活動

・ Creative New Zealand (ニュージーランド芸術委員会)の助成が豊富、Pacific Arts 部門がある。ニュージーランド多文化主義の結果としての太平洋芸術に対する助成（造形芸術の他にも、音楽、パフォーマンス、演劇等）

- ・太平洋諸島アーティストとは？——ハーフが多く、太平洋諸島そのままでなく、活動自体のハイブリディティが目立つ。
- ・太平洋諸島では専従アーティスト活動は難しい (Momoe von Raiche もアートで生活はしていない)。サモアで唯一専従アーティスト、Penehuro Papali'i は、日本の芸術専門学校卒業後、アートの先生等を経て、自分で芸術学校主宰 (2003年に会ったとき)。教会のステンドグラスを注文生産、切り株の木彫に専念。
- ・太平洋の表象がないと、太平洋諸島民アーティストらしさがない。メタフォリックにまたはメトノミックに太平洋の表象が必要 (ただし、個別の諸島文化の個性はあまり表現されず区別がつかない)。しかし、それにあまりこだわると、エスニック・アートで終わってしまうので、そこは個人の選択となる。現在では、太平洋諸島民のアイデンティティ選択が目立つ。

5) おわりに——太平洋諸島民のエスニシティへの展望

現代的な太平洋諸島民の芸術活動は本国では寂しい。移民の世界で開花するのも、先進国ではアートの市場が存在するから。ニュージーランド太平洋諸島民というエスニシティは今後育っていくはずである。

文献抄

- Mallon, Sean (2002) *Samoan Art & Artists*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Mallon, Sean and Pandora Fulimalo Pereira (1997) *Speaking in Colour: Conversations with artists of Paicific Island heritage*. Wellington: Te Papa Press.
- Mallon, Sean and Pandora Fulimalo Pereira eds. (1997) *Pacific art Niu Sila: the Pacific dimension of contemporary New Zealand Arts*. Wellington: Te Papa Press.
- Thomas, Nicholas (1995) *Oceanic Art*. London: Thames and Hudson.
- 7th Pacific Festival of Arts (1996) *Taeao Fou i Mea Sina: The First Pacific Festival Contemporary Art Exhibition Sept 12-20, 1996*. Apia: Festival Office.

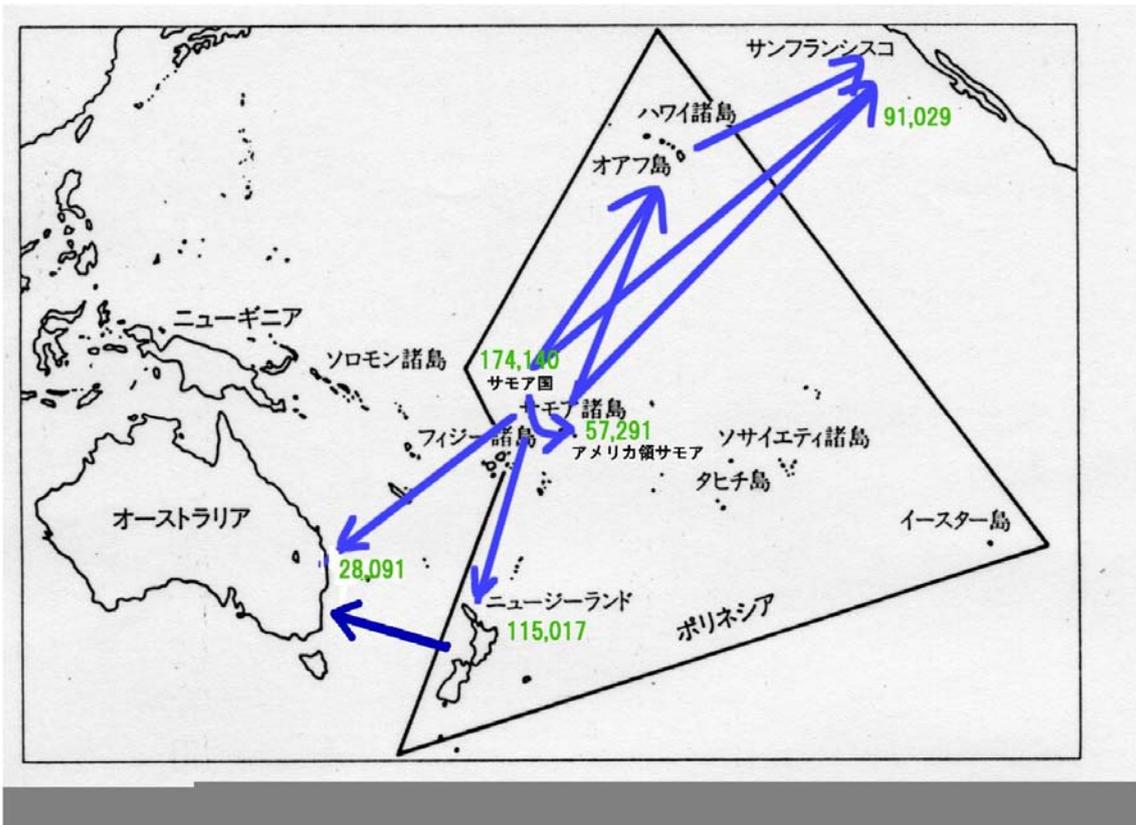


図2 サモア人の人口移動（アメリカ合衆国 2000 年センサス、ニュージーランド、オーストラリア、サモア独立国 2001 年センサスを使用）

表1 ニュージーランド在住太平洋諸島民とその本国人口

	NZ 在住人口	本国人口	本国調査年度
サモア独立国	114,435	174,140	2001
クック諸島	52,227	18,027	2001
トンガ	40,713	97,781	1996
ニウエ	20,148	2,088	1997
フィジー	7,041	775,077	1996
トケラウ	6,204	1,537	2001
その他太平洋諸島	7,227		
合計	321,798		

(NZ statistics, 2001 census data, SPC statistics)

中部ジャワにおけるバティック工房の「もの」と労働

佐藤純子（東京大学大学院）

一回性の強い二者関係取引の連鎖として説明される、非常に小さな単位のジャワでの経済行為の中に「もの」を位置づけることは、二者関係それ自体が、人間だけでなく「もの」があるからこそ成立していることを認識させる。労働管理が最小限で無秩序にさえ見えるバティック工房の生産において、秩序が発生し、活動が成り立っている。本発表では、このような視点から秩序の発生と労働管理を見るものである。

バティックとは、ジャワ中部では17世紀から生産されて来たろうけつ染めの布帛である。一般的なイメージに反し、バティックは自らの使用のためでなく、昔から商品として生産されてきた。手描きバティックは現在でも村人の現金収入源の一つとなっている。

発表者は2005年から2007年にジョグジャカルタ市内のバティック工房で調査を行った。ジャワ島でバティックの柄を蠟で描く労働者（以下「労働者」）は通常農村出身の女性である。仕事は通常請負の形態を取り、工房経営者から蠟と布を受け取ることで、請負契約関係が結ばれる。

一人が一枚の布に蠟で柄を描く作業の一段階は、半日から1週間ほどで、それが経営者との契約期間に当たる。両者の関係は純粋に経済的な契約関係である。経営者も、生産活動を純粋な経済的利得追求と見ている。親族や知人といった社会関係すら、利得追及には影響を与えない。

一方労働者は、居住する村の日常において、世帯内の女性や村の隣人が在宅で行う作業を手伝う形で訓練を始める。求職の際は村の知人を通じて経営者にアクセスし、経営者から蠟と布を受け取り、工房もしくは村の自宅に持ち帰って作業をする。

工房で作業をする労働者の中には一種の自治がある。働いている者たちが、新入りを暗黙のうちに選び、はじかれて来なくなる者もいる。労働条件などに不満がある場合も、労働者は断りもなくある日突然来なくなる。勤務時間は決まっておらず、だいたい朝8時から4時ごろだが、村での儀礼や共同農作業に応じて、休むこともある。

経営者と労働者の社会経済的地位は離れており、両者が共に座ったり、行動を共にすることはまず無い。作業場を監視する者もいない。経営者は特に指示があれば蠟と布を渡す時に言うが、作業場には入らない。蠟の温度と状態に合わせた作業をせかしても、作業効率は変わらない。根気のいる仕事なので、時に談笑し気晴らしをしながら続ける。また伝統柄については、蠟を溶かした鍋を囲んで作業する仲間がたいい知識を持っているので、経営者に聞く必要は無い。

作業に使う道具や修繕には、ご飯粒、ぼろきれ、箒など村の日常で親しんでいるものが利用されている。それらが無い時は経営者に言わず、工房の家事労働者から調達する。労働者はよく、「自分は(家事の)経験がある」のでこの仕事ができる、と言う。その物理的

な知識の応用が、この仕事をする資格だと認識している。労働者たちの選択肢内の職業一般において、労働者は雇い主から注意されると、怒られた、できない、と言ってやめてしまう。しかしこのパティック工房では、経営者に言わないと入手できない工業製品のような、労働者と親しみのないものは避けられ、自分たちで都合しているため、経営者から遠ざかり、自分たちの輪を保つことが可能になっている。

このように、労働者間の共同性により、監視無しでも作業が進む。ではどのように労働者と経営者の繋がりが保たれているのか。経営者は良い技術者を確保したいが、労働者内では平等意識が強く、技術による賃金の差は非常に嫌がられるので、難しい。一回の契約と支払いが終わると、経営者と労働者間をつなぐものは無い。

蠟で柄を描く作業は、一段階をさらに数段階に分割できるので、より多くの労働者を吸収できる。労働者たちに、農業賃労働、物売りなど実地的な職業選択肢間を比較してもらった結果、「常に仕事がある」という評価が最も高かったのはパティックであった。この点は、兼業により生計手段のリスクを分散している労働者たちにとって、魅力である。

また、柄を描く対象としての半製品バティアンが、労働者と経営者を繋いでいる。バティアンの所有者は経営者なので、それが作業場の竿にかかっているなら、その作業を終えて経営者に返すまで契約関係が続くことを意味する。それゆえ、自分の担当するバティアンがあれば、また戻って来て作業をする。作業中に次のバティアンを請け負うと、次の契約への延長が視覚的に見える。

労働者たちが共通の村の情報を共有し、弱い繋がりを持っていることも、労働者を工房へと引き戻す。都市の工房の中に、村の日常世界を作り、自治領域にすることで、経営者と距離を保っている。その共同性から何を経営者が受け取るかという点だけでなく、共同性のある労働者たちと、利得追求をする経営者との弱い繋がりが保たれている様子をもものから見たのが、本発表の趣旨である。